

3 文化の違いへの理解からつながる

事例 7

「僕のランチ」 ～ 互いの文化の違いを受け入れる ～

5歳児 6月(在日11ヶ月)

こんなきっかけ
みつけたよ!

A児は、父、母、弟の4人家族である。家庭では、ほぼ英語で会話をしている。園では、少しずつ覚えてきた日本語を使って気の合う友達に思ったことを伝え、一緒に遊ぶことを楽しんでいた。保育者は、様々な国の生活や食文化の分かる掲示物や絵本をいつでも見られるようにしておいた。

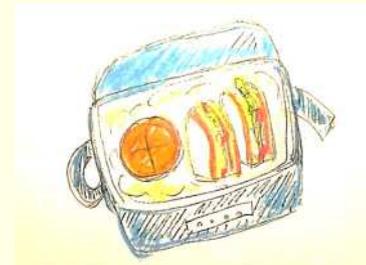
園の昼食は、普段は給食だが、年に数回、弁当持参の日がある。秋の遠足の日、子供たちは、待ちに待った弁当を食べようとしていた。



こうしたよ!

「僕は、おにぎり!」「私はオムライス!」「私はお母さんが作ってくれた大好きな卵焼き!」と、子供たちはうれしそうに見せ合ったり、食べ始めたりしていた。A児はランチボックスを取り出した。保育者は、『A児は洋風の弁当なんだな』と思いながら、他の子供たちが見せる弁当を見たり、話を聞いたりしていた。

すると、「あれ?これ、持ってきていいの?」とB児の声がした。保育者が目を向けると、B児がA児の持って来た切り込みの入った丸ごとオレンジを指差していた。A児は困った顔をしていた。



【オレンジやサンドイッチが入ったランチボックス】

保育者は、「あら、A児はサンドイッチとオレンジだね。おいしそう!」と声を掛けた。A児は、ぱっと表情が明るくなり、顔を上げた。C児が、「こういうのって、『ランチ』って言うんでしょ?」とA児に聞いた。するとA児が、「そうだよ。イギリスでは、給食はないんだ。いつもお昼は持って行くんだよ。こういう僕の好きなサンドイッチとかね。お母さんが作ってくれるんだ」とうれしそうな表情で話した。

C 児が「僕もサンドイッチ好き。今日はおにぎりだけだね」と言うと、B 児が「僕も好き。フルーツは、ママが切ってくれるけどね」と笑った。

A 児は、ほっとした表情で、おいしそうにサンドイッチを食べ始めた。



保育者が、「おいしそう！」と肯定的に受け止めたことで、周囲の子供たちは、イギリスの昼食を肯定的に捉えました。また、A 児のランチの説明を聞いて、B 児やC 児は文化の違いを受け入れました。



ここが大事！

文化の違いを肯定的に受け入れることで、
友達への親しみが深まります

子供たちが文化の違いに気付いた時には、保育者が関心を寄せて聞いたり、肯定的に受け止めたりする姿を見せていくことが大切です。そして、子供が文化の違いの面白さを伝え合ったり、違いを受容し共感したりできるよう支えていくことも大切な援助です。

コラム このような環境の工夫をしています

在籍する園児の母国について親しむことのできる絵本を置いたり、地図などを掲示したりしています。多目的の保育室に設定し、誰でも見たい時に見たり、触れたりできるようにしています。

世界の様々な国への関心が広がり、どの子も大切にされていることが伝わります。



【 多国籍の子供たちを大切にしたい保育室の掲示（壁面） 】